

エッセイ

ー 私の文学館散歩 (十一) ー

軽井沢・絵本の森美術館を散歩する

ー または、道草の多い散歩 ー

松村 茂治

わが家の絵本事情

散歩に出かける前に、わが家の書架の一つ（いや、最近新しい書架を作って分けたので二つと言わべきか）を占領している絵本について説明しておきたい。

我が家には、二種類の絵本があるなどと書くと、大げさな、もったいぶった言い方のように思われるかもしれない。種明かしをすれば、一種類は、今や中年の域に入りつつあるわが家の子どもたちが読んだ本（正確に言えば、彼らに読ませようと思つて購入はしたが、その大半は「積ん読」になつている絵本・童話）、もう一種類は、親用の、つま

り私自身のために購入したものの、敢えて言えば、子どもたちには決して触らせなかつた絵本の二種類である。

子どもの頃から、絵本や童話をたくさん読んで来たといふのではない。むしろ、そういう文化的な環境からはほど遠い中で子ども時代を過ごして来た。その反動からか、遅まきながら、学生時代になって、トールキンやピアスなどを手にしたのだった。いぬいとみこやあまんきみに親しんだのもこの頃のことである。そうそう、作家デビューして間もない安房直子を知つたのもその頃だった。いずれ、あまんきみやいぬいとみこのような、我が国の児童文学

を牽引する作家になるのだろうと期待していたのだが、夭逝してしまつた。「ライラック通りの帽子屋」「白いオウムの森」などは、今でも、我が家の書架に収まつている。

本は、自分で選ぶことに意義があると考えていたので、いずれ結婚して子どもが出来たら、子どもたちに与える童話や絵本は、当然私が選ぶものと決めていたし、実際に子どもが出来てからは、多少の実践もしてきたつもりだが、素人のやることには限界があつた。

上の子が二、三歳になつた頃、当時勤務していた職場に、児童書出版社のセールスマンが訪ねて来た。私が勤務していたのは教員養成系の大学だつたこともあり、セールスマンは、すでに大学の図書館や教員たちとつき合いがあつたようで、勝手知つたる・・・という感じで私の研究室を訪ねて来たのだつた。当時は、今とは違つてのんびりした時代で、〈教育機関への不審者の侵入〉といった心配事はなく、大学は野放図すぎるくらい開放的なところになつていた。児童書のセールスマンだけでなく、百科事典のセールスマンも、生命保険の外交員も、ときには駅近くの飲み屋のお兄ちゃんも出没していた。

彼は、はじめ、子ども用に組まれた児童書のセットのパンフレットを持ってやつて来たのだつた。先にも述べたように、子どもの本は自分で選ぶ！と決めていたので、当初

は、専門家による選定とは言え、他人の選んだ児童書のセットなど、購入する気はなかつたのである。しかし、結論から言うと、まんまと彼の勧めに乗つてしまつたのだった。本屋の肩を持つわけではないが、説明を聞くうち、これだけの本を自分で選び揃えるのは、容易なことではないといふことが分かつてきた。それは、単に種類が多い、量が多いというだけではなく、見たことがないような本、換言すれば、私の趣味では絶対に選ばないであろうような本が多数含まれていたからである。これを機会に、私自身の視野を広めることがあつてもいいだろうと考え、とりあえず、子どもに年齢に合わせ、一番幼い子ども向けのセットを購入することに決めたのだつた。

本が届くと、私個人の判断だったら、先ずは選ばなかつただろうという絵本に、子どもは敏感に反応した。毎日のように読み聞かせをするうち、お気に入りができ、何冊かは、空で言えるほどまでになつた。私自身に関しても、このセットを通してはじめて知つた作家や作品がたくさんある。以来、子どもの成長に合わせて、数種類のセットを購入し、それらは、今や古書独特の汚れと臭いを醸し出しながら、わが家の比較的大きな書架を占領している。これが、一種類目の児童書についてのあらましである。

セールスマンが、子ども用セットの案内を持って初めての私の所を訪れたときに、〈お父さん用〉のセットのパンフレットも持ち合わせていたのかどうかは覚えていない。おそらく、私と話をするうち、〈これはものになる!〉と判断し、改めて出直すことになったのではなからうか。覚えているのは、彼の住まいが私の職場に比較的近かったこともあって、複数回、彼の訪問を受けることになったということである。彼はたいてい自転車をこいでやって来た。

彼が売り込みたかったのは、勤務する出版社が少し前に売り出した、「世界の絵本館 オズボーン・コレクション」という、百年以上も前に出版された絵本の復刻版のセットで、説明によれば、カナダ・トロントの公共図書館に収められている一万数千点に及ぶ、言わば絵本の古典の中から、三十数点を選び、原本に忠実に複製したものだという。絵本の専門家でもない私は、原典がどれほど価値あるものなのか、オズボーンが何を意味するのも全く知らなかったし、そこに選定されている絵本の作者も作品も初めて目にするものがほとんどだった。公の図書館ならいざ知らず、こちらは何も知らない素人なので、真正正銘の高い買い物にならないかという心配がなくなかったが、パンフレットの中に、手元に置いておきたくなるような本が何点か含まれていたのが命取りになった。

この「オズボーン・コレクション」に次いで出版された「ベルリン・コレクション」(ドイツ国立図書館に所蔵されている絵本の復刻版)、さらにその後出版された「オズボーン・コレクションII」も、親切というよりも商売熱心な彼は、忘れずに私の所に、パンフレットを持って来てくれた。つまり、私は、完璧なカモになってしまったのだ。これら三つの復刻版のセットは、その後、別の出版社で企画・販売されたセットと併に、お父さん用の書架に収まっている。これが、二種類目の児童書が我が家の本棚に収まるに至った経緯である。

先に、子ども用の本が、「積ん読」だったと記したが、実は、お父さん用のセットも同様の運命を辿り、購入して四十年ほどの歳月が経過した。購入したときの理由づけは、いざれ定年退職を迎え、時間にゆとりが出来たらじっくり味わって読もうということだった。当時は、勤め始めたばかりのことで、定年退職など遙か彼方のこと、敢えて言えば、我が身に及ぶようなことは考えられなかったわけだが、いつの間にか、「いつ読むの?」「今でしょ!」という事になってしまったのである。

昔、どこかで聞いた歌

最初に手に入れたオズボーン・コレクションのなかで、

思わぬ出会いがあった。

セットが届いたときに、欠本等がないか、中身の確認をしたのは言うまでもない。そのとき、本腰を入れて読むのは数十年前のこととしても、さっと目を通すくらいのことはおきたいと、目立った装丁の何冊かを手に取り、ページを繰ってみた。その中の一冊に、この本があったのである。

青地の厚紙の表紙に金箔押しで、「Sing-Song」の書名と「Christina・G・Rossetti」の著者名、それに二、三のデザイン化された人物や動植物の絵も金箔押しされている。金箔は表紙だけではなく、本の天・小口・地にも施されている。初版は一八七二年、日本では明治になって間もない頃のことである。

この本は、どうやら童謡詩集のようで、一、二頁に一篇の詩とその内容に即したシーンを描いたデッサンが配されている。装幀の金箔押しは豪華だが、モノクロの挿絵からは繊細な印象を受ける。百年以上も前に、どんな職人がこんなお洒落な本を作ったのだらう、どんな家の子どもがこんな贅沢な本を手にしたのだらうと、想像力を刺激されたのだが、偶然開いた頁に、こんな詩が載っていた。

Who has seen the wind ?

Neither I nor you :

But when the leaves hang trembling
The wind is passing thro'.

百頁以上ある本の中で、なぜこの詩のところの手が止まったのか、そして、なぜ敢えて読もうとしたのか、不思議と言えば不思議である。たまたま開いた頁にあった詩が、偶然にも私に理解出来る程度の易しい英文だったということもあるが、易しきだけなら、他にも読めそうな詩はいくつかある。読み始めてすぐに、まさしく、鳥肌が立つような思いがしたのだった。そして、「へえっ、これが原詩だったのか!」と声をあげたのを覚えている。小さい頃耳にした歌詞が記憶に残っていて、英文を見た瞬間に、何十年もの間、耳にも口にもしていない歌詞が思い出されてきたのである。私の記憶にあった歌詞は、以下の通りである。

誰が風を見たでしょう
僕もあなたも見やしない
けれど木の葉をふるわせて
風は通り過ぎてゆく

学校で習ったという覚えはないから、ラジオかテレビで

耳にしたものだろう。おそらく繰り返し聞いていたに違いないと思うものの、いつのことだったかはつきりしない。今でも口ずさむことができるということは、言葉とメロディがしっくりと馴染んでいるからに違いない。いずれにしろ、この「Sing-Song」を開いてはじめて、元歌が、外国の、しかも百年以上も前に書かれた詩だったということを知ったのだった。ただし、妙な言い方になるが、そのときの私の印象は逆で、「Sing-Song」の英詩が原詩だったというのではなく、昔、日本語で覚えた歌詞が、そのまま英訳されている、というものだった。それだけでも驚きだったのだが、今回、この稿を執筆するにあたって調べてみて、もう一度驚くことになった。この詩を日本語に訳したのは、西条八十だということである。

西条八十と言えば、昔懐かしい・・・と言っても、私たちよりも一世代上の人たち、つまり、私の親たちが馴染んできた歌謡曲、いわゆる戦前からの懐メロの作詞者として有名な詩人である。最も有名なところでは、「ゲイシャワルツ」に「東京音頭」、「青山脈」も彼の作詞だった。私は、個人的には「東京行進曲」の歌詞が面白いと思っているが、探っていけばまだまだお馴染みの歌詞に行き当たる。そうそう「誰か故郷を思わざる」も彼の作詞だった。どの歌も、題名を聞いただけで、歌詞とメロディー、とき

には、その歌に結びついた情景までが甦ってくる。その西条八十が、ロッセッティの原詩を極めて忠実に、しかも自然な日本語に移し替えている。探してみると、彼は、童謡の作詞家としても優れた仕事を残していて、誰もが知っている「カナリア」「かたたたき」「鞠と殿様」なども、彼の作詞だという。

そうした童謡の作詞家としての一面を持ちながら、西条八十は、戦前・戦中には「若鷺の歌」や「同期の桜」などの軍歌も手がけ、戦後になると、戦争協力者のレッテルを貼られたことでも有名だが、元々は、フランス象徴詩の研究者だったというので、さらに驚かされるのである。経歴を見ると、彼はアルチュール・ランボーに関する研究論文を著しているようだ。個人的には、私もランボーの詩はいくつか読んだことがあるので、彼のランボー論を読んでみたいと思うが、それは別の機会の話としよう。

「Sing-Song」のなかに、他にも日本語に訳されて、我々の耳に馴染んだ詩がないか、少し時間をかけて読み直してみたが、「誰が風をみたでしょう」のような例は、見当たらなかった。風をモチーフにした詩はいくつかあったが、その具象性という点では、「誰が風をみたでしょう」が一番分かり易かったように思う。

今、「誰が風をみたでしょう」を、この詩のタイトルの

ように書いたが、「Sing-Song」のどの詩にも、いわゆるタイトルはつけられていない。目次には、詩の第一行目が、あたかもタイトルのようにして示されているだけである。

「Sing-Song」は、絵本コレクションの中の一冊ということなので、どの詩にも、細密なドローイングによる叙情豊かな挿絵がつけられ、詩と絵が一体になっているのが印象的である。本扉には、挿絵画家としてアーサー・ヒューズの名前があるが、どういう画家なのかは、知らない。

詩も挿絵も、全体的に、寂しき、悲しきに満ちているというのが、さっと見ての印象だった。その典型的なものの一つが、次のような詩である。

Motherless baby and babyless mother,
Bring them together to love one another.

この詩の挿絵には、乳母と思われる女性が、若い婦人に生まれて間もない赤ん坊を手渡そうとしているシーンが描かれている。詩を読んだ後で見ると余計にそう思うのか、幸せそうな親子の触れあいには見えない。

この詩を読んで真っ先に思い浮かべたのは、私は読んだことはないが、「母のない子と、子のない母」というタイトルの童話があったのではないかとということだった。調

べてみると、それは壺井栄の小説のようだが、この小説のタイトルが、ロッセッティの詩からとられたのかどうかは（多分、そこから取られたものと思うが）、正確なところは分からない。

次のような詩もある。

All the bells were ringing
And all the birds were singing,
When Molly sat down crying
For her broken doll:
O you silly Molly
Sobbing and sighing
For a broken doll,
When all the bells are ringing,
And all the birds are singing.

鐘が鳴っていたり、小鳥がさえずっていたりして、一見、にぎやかそうだが、挿絵は、人形の体を抱えた女の子（モリー）の前に、もげた人形の首が転がっているというものである。北原白秋の「金魚を三匹捻じ殺す・・・」ほどの残忍なイメージはないが、主題は、ベルや鳥ではなく壊れた人形の方にあることが分かる。

この詩集の扉には、木陰で子どもを抱きながら編み物をしている母親、それを木の上から見守る天使たち、その親子の周りには子羊や子馬、小鳥たち、そして動物の子どもたちの近くにはそれぞれの親が書き込まれていて、親子の間のほのぼのとした情感を歌うのが、この詩集の特徴かと思ったが、必ずしもそうではない。

もちろん、赤子を抱く若い母親、母親が揺らす桜の木の下でエプロンを掛けてサクランボを待ち構える少女、親羊の周りで飛び回る子羊、巣の中で親鳥にエサをねだる小鳥等々の挿絵など、親子の間の暖かそうな雰囲気伝わってくるものも少なくないが、他方、亡くなった赤ちゃんの墓の前で跪く親子、死んで地面に横たわる鳥、親羊を亡くして雪の中に佇む羊の子を、連れて帰って暖めようとしている少女など、悲しさや寂しさを歌ったものも少なくない。

図-1の挿絵のついた詩など、私には、童謡のテーマには成り得ないと思えるのだが、むしろ、この詩人は、そうした情感や雰囲気や歌うのを真骨頂としているようである。

この絵で、若い女性（おそらく母親）が凭れているのは揺りかごだが、その中に赤子はいない。この詩には、赤子の眠る墓には枯葉が降り積もっている、とある。

こういう調子なので、先に、楽しそうな場面を歌った詩もあると指摘したが、よく見ると、どれからも底抜けに明

カナリアは、うしろの山に捨てられるか、背戸の小藪に埋められるか、柳のムチでぶたれるかと脅されている訳だし、「てるてる坊主」では、天気が良くなるなかったら、首をチョン切るぞとまで言われている。

この「Sing-Song」の頁を、ラパラと繰るうち、私は、金子みすずのことを連想していたように思う。それは、両者が女性だからと言うだけでなく、詩の内容、雰囲気やそうさせたのだと思う。みすずの詩をいくつも知っているわけではないが、きっと、浜辺で、大漁のお祝いをしているとき、海の底では、魚たちがお串いをやっている、というあの詩を思い出していたような気がする。

久し振りに「研究論文」を読む

本稿の執筆を機に、ロセッティのことをもう少し詳しく知ろうと思ひ、ネットで情報収集をしていて、そのものズバリの論文に行きつくことができた。「クリステイナ・ロセッティと大正期の童謡運動」（高橋美帆）がそれで、詩集「Sing-Song」のことが詳しく取り上げられている。

著者は、英米文学の研究者と思われる。

この論文によれば、ロセッティの詩に添える挿絵は、それまでではもっぱらロセッティの兄が請け負ってきたが、この「Sing-Song」に関しては、ロセッティ自ら、旧知のア



図-1 空の揺りかご

るいという印象は受けない。むしろ、どの挿絵も、どこもなく寂しげで、それが、詩の内容とマッチして、独特の効果をあげているように思われる。

今まで、深く考えることはなかったが、白秋に限らず、童謡の歌詞は案外、残酷であったり非情であったりするのかもしれない。西条八十の「カナリア」では、歌を忘れた

ーサー・ヒューズに依頼したようで、それがこの詩集の評価を高めることに一役買っているということである。おそらく、ヒューズ好みとも言える繊細な絵の雰囲気とどこかに悲しみをたたえたような詩の内容が相乗効果をもたらすことになったのだろう。アーサー・ヒューズは、十九世紀半ばにイギリスで結成されたラファエル前派に属する画家とのことである。

論文では、ロセッティと我が国、大正期の童謡運動との関係を論じているが、拙文では、西条八十との関係についての、取り上げる。

我が国の詩人の中で、いち早くロセッティを認め、影響を受けた人々には、薄田泣菫、北原白秋らがいるが、「特にロセッティを高く評価し日本での受容に大きく貢献したのが、西条八十」であり、「風」以外にもいくつかの詩が、西条八十によって翻訳されている。先に紹介した、「鐘が鳴っている」「サクランボ取り」の訳詞も、この論文の中で紹介されている。

この論文を読んでいて、驚いたことの一つは、我が国へのロセッティの紹介者だった西条八十が、金子みすずを見いだした人でもあったということである。西条は、大正十一年に引き継いだ「童話」誌の読者欄に投稿されたみすずの詩を高く評価し、「・・・この感じはちやうどあの英國

のクリスティナロセッティ女史のそれと同じだ（中略）この調子で努力して頂きたい」と、ロセッティと重なる部分のあることを指摘し、さらなる精進を期待する旨のコメントを残している。しかし、みずぶはその後間もなく、自らの命を絶っている。享年二十七歳。西条八十は一度きりとなつたみずぶとの対面の思い出を、雑誌に追悼文として残しているとのことである。

作品に於ては英のクリスティーナ・ローゼッティ女史に遙らぬ華やかな幻想を示してゐたこの若い女詩人は、第一印象に於ては、そこらの裏町の小さな商店の内儀のやうであつた。しかし、彼女の容貌は端麗で、その瞳は黒曜石のやうに深く輝いてゐた。

この論文のなかに、もう一つ、思わぬ発見があつた。

数年前、この同人誌を差し上げた方から、「『琅』というのは、『琅玕』の『琅』ですか？」と聞かれたことがあつた。そのとき、私は、琅を美しい玉、翡翠、としか理解してゐなかつたので、「そうだと思います。日夜研鑽して玉のような文章を書けるやうにと創刊者が名づけたのです」と答えたのである。大宇源（角川書店）には、「琅玕」について、玉に似た美しい石。美しい文章のたとえ、

絵」という絵本（教科書と言うべきかもしれない）の著者、ヨハン・アモス・コメニウスである。

現在どうなつてゐるか知らないが、昔、教員養成系大学の学生だった私は、教育学の授業の中で、何度となく、この名前を耳にしてきた。もちろん絵本作家としてではなく、教育学という学問の創始者、言わば「教育学の父」といった位置づけではなかつたかと思うが、いや、「教育学の父」は、ペスタロッチだったかもしれない・・・いづれにしろ、遠い昔の、眠くなるような授業の中での話だ。

今改めて、セツトに添付されている解説に目を通してみると、「ヨハン・アモス・コメニウスは、モラビアに生まれた教育家であり、社会改革家（中略）、彼の書いた多くの論文や教科書は、当時、広く世の人びとに読まれたが、最も大きく、永続的な影響をヨーロッパ諸国におよぼしたのは、その『世界図絵』（初版は、十七世紀中頃）であつた」とある。学生時代には、右の耳から入って左の耳から抜けていったような名前だが、今になって、つまり教育に関わる仕事を離れて改めて、教育学の大御所の著した教科書を手にするというのは、何とも皮肉なことである。

この「世界図絵」の初版は、ラテン語で書かれていたやうだが、コレクシオンに入っているのは、各頁が英語とラテン語の対訳形式になつてゐる。新書版ほどの大きさで、

とある。我が同人誌の創刊者は、清らかな玉のような文章を目指し、日々文章に磨きをかけるやうにとの思いから、本誌を「琅」と名づけたのであつた。ところが、「琅玕」には、我が同人誌「琅」よりも百年近くも前に、さもありなんと言ふべき使われ方をされてゐたことを、この論文で知つたのであつた。

金子みずぶは、亡くなる数年前に、内外の詩人の作品を集めて自選集を作り、その表題を「琅玕集」としたといふのである。私に、「『琅玕』の『琅』ですか？」と質問された方は、国語教育の専門家だったので、ひよつとすると、翡翠ではなく、みずぶの琅玕集を言いたかつたのではないかと思つた次第である。

まさか、コメニウスに出会うとは・・・

はじめに購入した「オズボーン・コレクシオン」には、ケイト・グリーンナウェイやランドルフ・カルデコット、ウオルター・クレインなど、アンティーク絵本のファンなら誰もが知っている作家が入つてゐるが、当時の私は、これらの誰も知らなかつた。無論、前記のロセッティも、このコレクシオンで初めて知つた名前だつた。ところが、そんな私でも、この中に、ただ一人知つた名前があつた。それは、コレクシオンの冒頭に組み入れられている「世界図

約二百頁、およそ一頁に一つの項目、おそらく、社会に出るまでには知つておかなければならない基本的な概念（後述）が取り上げられ、挿絵（木版画）入りで説明されている。言わば、絵入り百科事典のような作りの本である。

本文の第一頁は、「導入」で、先生と子どもの対話形式になつており、挿絵には、机の上に本を拡げてこちらを向いた先生と、そこを訪れた子どもその後姿が描かれている。

先生…来なさい、少年よ。賢くなるために、学ぶのです。

生徒…どういう意味でしょう、賢くなるとは？

先生…必要なこと全てを、正しく理解し、正しく行い、

正しく語ること・・・

生徒…誰が教えてくれるのでしょうか・・・

この本では、はじめにアルファベットを学ぶことになつてゐる。犬や猫、鳥、蛙、蛇などの絵と、簡単な説明がついてゐるので、はじめ、動物の頭文字からアルファベットを導くのかと思つたが、そうではないらしい。そもそも、元はラテン語なので、ラテン語の動物名と英語のそれとは必ずしも一致してゐないはずだから、頭文字で教えるのには無理がありそうだ。よく見ると、名前ではなく、各動物の鳴き声とアルファベットを結びつけてゐるやうに見える。

たとえば、「N」にはネコの絵が対応していて、ヒントに「nau nau」とある。つまり、「ニャー ニャー」の「N」ということらしい。「E」には、人間の赤ちゃんの絵が対応していて、「e e」とあるので、赤ちゃんは「えーん、えーん えーん」と泣くということと理解した。「S」には蛇の絵が対応していて、「Serpen」と書かれているので、英語では「Snake」の他にフランス語のように「Serpen」ということもあるのだろう、つまり、ここは頭文字かと思ったが、そうではなく、ここでも鳴き声(?)をヒントにしているようで、「シャー」と威嚇するときの声を結びつけたらしい。

こんなふうには、アルファベットを見ているだけで楽しくなるが、少し、中身について紹介しておこう。

はじめに学ぶ項目は「神」。神は世界の中心にいる全知全能の存在であると説明されている。それに続いて、世界天体、空気、水、さまざまな動植物など「自然界」のこと、人類の歴史、人の発達、体の部位、体の内部、骨など、「人間の心身の特徴」、農業、養蜂、パン作り、狩り、醸造、機織り、仕立て屋、靴屋、大工などの「労働(産業)」、書くこと、印刷、製本、学校、勉強、哲学、幾何学、月の満ち欠け、日食と月食など「学校での学習」に係ること、寛容さ、勤勉、忍耐などの「道徳性」、男と

女の社会(結婚生活ということか?)、両親と子どもの社会(家庭生活?)、主人と召使いの関係など「人間関係」、その他、町、裁判、医学、埋葬、舞台演劇、フェンシング、テニス、サイコロ遊び、男の子の遊び、戦士、基地、海戦、宗教など「社会生活」に関すること、そして最後のテーマが、「最後の審判」となっている。

この本は、先に述べたように、子どもたちが世の中に出ていくに当たって、身につけておかなければならない、基本的なことがらについて説明している。現在ではもちろんのこと、当時でさえ時代遅れとなっているような項目や説明もあると思うが、当時の人々がどういうことを大事にしていたかということが垣間見えて興味深い。それらの中から、私が興味をひかれた二、三の項目を紹介してみたい。

はじめに目についたのは、人の発達が七つの発達段階(The seven ages of man)として説明されている項目であった。それは、Infant—Boy—Youth—Young man—Man—Elderly man—Old man の七段階で、現代の発達心理学の区分とあまり変わりはないように思える。気になるところがあるとすれば、「人」を意味するところが、すべて、「man」で表されている点で、七段階のうちの「Boy」は「児童期」に該当すると思うが、女の子はどうなっているのだろう。その後もほとんどが「man」で表記されている

て、すでに男性優位の社会だったことが想像できる。子どもたちが野外を走り回って遊んでいる場面も、ボールを転がしてスポーツをしている場面も、絵には男の子しか描かれてなくて、説明も「Boys exercise」となっている。

人間関係については、男女の関係、親子関係の次に、主人と召使いの関係について学ぶことになっている。この本で勉強したのは、当然、主人側の子どもたちだろう。主人には主人の振るまいが、召使いには召使いの振るまいが求められ、決してそれを取り違えてはならない・・・そういう時代だったということである。

時代を感じさせると言えば、二つ気になる項目があった。一つは、ガイドブックに「片輪者」とあり、現代ならさしずめ、「異形の人たち」とするのだろうが、Deformed and Monstrous People と題された項目である(図-2)。挿絵の中央に立つのは巨人症の男、その右側の小人症の男はせむしとある。左には、体が二つに分かれた人(枯れ葉剤による結合双生児と同じか?)が描かれている。今なら、人権教育の一環として使われることになるのだろうが、そういう時代ではなさそうだから、これで何を教えようとしたのだろう。

もう一つは、「裁判」に続いて学ぶ「悪いことをした人の報い」と題された項目(図-3)で、画面の左側には、



図-2 異形の人の

後ろ手に縛られた男が、槍を持った男たちに、牢獄から引き立てられ、刑場に向かうところが描かれている。画面右側の手前から奥にかけて、さまざまな刑が執り行われている。たとえば、地べたに寝かされたまま、馬に体を引きづられてゆく男(馬引きの刑?)、背中をむき出しにされ、むちを打たれる男(鞭打ちの刑)、丸太の上で手首を切断された者(手足切断の刑?)もいる、そして、画面の一番

奥では、首つりの刑が行われている等々である。死刑廃止の論議の中で、犯罪の抑止効果云々と言われることがあるが、この項目と挿絵はまさに、そうした抑止効果をねらったものである。当時の子どもたちはどのような受け止め方をしたのか、いや、教師は、どのような教え方をしたのか、興味が尽きないところである。

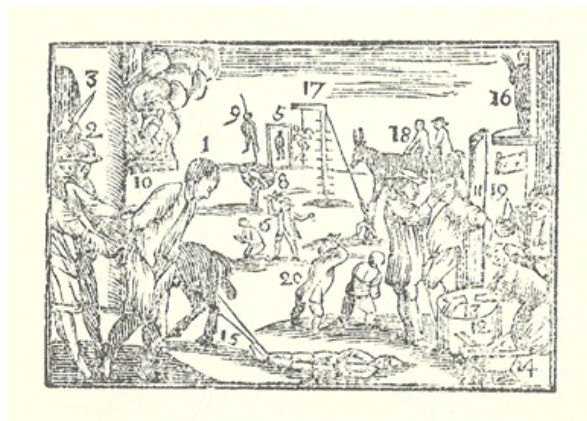


図-3 悪いことをした人の報い

この挿絵を見ながら、思い出したことがあった。京都のどこかの寺で見た、六道輪廻の地獄図である。鬼に体を切り刻まれたり、釜ゆでにされたりしている絵で、この世で悪事を働くと（いや、善行を積まないとか？）、地獄に落ちてひどい目に遭うということを教えているわけで、恐怖心に訴えて人を導いてゆくというのは、洋の東西で変わらないのかもしれない。私の敬愛する偉大な行動主義心理学者、B・F・スキナーは、「罰無き社会」の重要性を訴えたが、やはり、罰がないと、なかなか教育効果は上がらないのかもしれない。

そして「世界図絵」は、その最終頁に、先生と生徒が描かれた冒頭の絵と同じ絵が使われ、ここまでたくさん学んできたのだから一層努力して賢い人になりなさい、と説いて結びの言葉としている。

軽井沢絵本の森美術館

散歩に出かける前にすっかり時間を取ってしまった。オズボーン・コレクションは、三十冊ほどのセットなので、残りは別の機会に取り上げることにして、そろそろ出かけることにしよう。

はじめて絵本の森美術館に行ったのは、近くにある軽井沢タリアセンに行ったときのことだから、二年ほど前のこ

とになる。そのときは、塩沢湖畔に移築されているという、ウィリアム・ヴォーリズの設計による朝吹家の別荘・睡鳩荘を見ること、そしてそこは道路を挟んで反対側にある軽井沢高原文庫に寄って、この地に縁のある作家たちについて情報を収集することが主な目的で、絵本の森美術館のことは、ほとんど念頭にはなかったのである。同行の妻は、睡鳩荘にも高原文庫にもあまり関心はなく、少し先にあるエルツおもちや博物館で人形を買うことを楽しみにしていた。そこは、ドイツ・エルツ地方（旧東ドイツ）の伝統的な木工品（玩具や人形）の博物館で、このとき購入した木製の森林管理人の人形は、わが家の玄関で、来客たちに監視の目を光らせている。このおもちや博物館と絵本の森美術館は、経営母体が一緒なのだろう、博物館の入場券を買うと、美術館の入場券もついてくる仕組みになっている（一方だけを買うことも出来るようだが）、私は、人形の方は単なる付き添いでしかなく、絵本の方に関心があったので、別々に使えば、もっともっと都合の良いセット入場券だったのかもしれない。

絵本の森美術館は、東京方面から車で上信越道をやつて来ると、碓井軽井沢インターチェンジで高速を下り、南軽井沢の交差点で左折して国道十八号線を数分走り、塩沢交差点で左折した先、観光地図的には南軽井沢と呼ばれる地

域に位置している。公共交通機関としては、軽井沢駅からバスを利用することになるらしいが、運行頻度が良く分ならず、時間を気にしながらの見学ということになってしまふようなので、自分の車で行くのが無難と考えた。ただし、無難とは言え、博物館も美術館も、道路がちやうどカーブしている所に位置しているので、うっかりしていると通り過ぎてしまふようになる・・・つまり、ちよつとうっかりしてしまつたわけだが、通り過ぎた先には、軽井沢のカーリングホールがあり、妻はそこでカーリング体験をしてみたいと言うのである。昔、我が家の子どもが小さかった頃、赤倉のグレンデでスキーの回転競技に家族で参加したことがあった。競技と言っても、バスガイドさんがスカート姿で参加するような長閑な大会だったが、専門家が作ったコースには、滑ってみなければ分からない仕掛けがあり、カーリングも一度体験すれば、テレビの見方が変わるのではないかと言うのが妻の言い分だが、この年になると、どこに魔物が潜んでいるのか分からないのが怖い。

いや、カーリングではない。絵本の森美術館だった。そこは、道路から少し奥に入った小暗い森の中に点在する三つ四つの特徴ある建物から構成されている。建物同士は、遊歩道によってつながれているが、道をふさぐように草木が生い茂っていて、「運が良ければ、葉陰に住んでいる小

人に出会うことが出来ずよ」と言われれば、「そういうえば、さつき、風もないのに大きな葉が動いていたなあ・・」と答えたくなるような感じの所である。この、小人が住むような庭も、施設の重要な一部のように、入園時にもらったパンフレットには、「美術館と周囲の森をつなぐように広がる『ピクチャレスク・ガーデン』は、英国人ランドスケープデザイナー、ポール・スマザーが手掛けたもの。原生植物を中心としたナチュラルガーデンは、軽井沢の原風景そのものです」とある。

その、ピクチャレスク・ガーデンに沿って突き当たりまで行った所にある第一展示館は、屋根の中央部分が丸い展望台のようになっている特徴ある建物で、そこがメインの展示館のようである。

入って左側の展示室には、「欧米絵本のあゆみ」との表示が出ていた。入ってみると、何とそこに展示されていたのは、「オズボーン・コレクション」の一部だったのである。例のコメニウスの「世界図絵」も展示されていたが、何となく無造作に展示されているように見えたので、あれは我が家にあるのと同じ復刻版だったのではなからうか。ガラスケースに収められていた一冊は、「ナンセンスの絵本」だったように思うが、ケース入りと言うことは、あれはオリジナル版なのかもしれない。

いた児童文学の研究者・翻訳家で、ピーター・ラビツトの生みの親であるビアトリクス・ポター研究の第一人者とのことである。氏は、ここ絵本の森美術館の名誉顧問をされていたこともあり、おそらく、研究者としての第一線を退くにあたり、後進の研究に役立てるべく、自らの蔵書をここに寄贈したのではなからうか。

蔵書家が、自分のコレクションを大学や図書館に寄贈するということは、珍しいことではないが、そうして寄贈された本の中に、わが家の書架に収まっているのと同じ本が何冊も含まれているというのは、私にとつては極めて珍しいことである。もともと、わが家の「第一種類」に分類される児童書が、吉田氏のような、専門家によって選定されたものであったことを考えれば、わが家の書架を埋めているのと同じ本が、吉田氏の書架にも収まっているのは当然と言え当然である（ただし、わが家で購入したセットの選定委員の中に、吉田氏は入っていないかった）。妻もそのことに気づいていて、「家の本棚とよく似ているわ」と言っていたが、もちろん、吉田氏の書架には、我が家の何倍もの絵本や童話が収められているのもちろんのこと、研究書や外国語の書籍もたくさん収められていたので、素人のコレクションと比較することは慎むべきであろう。

私は気づけなかったが、後ろを歩いてきた妻が、その吉

百年前の貴重な絵本ということなら、ガラスケースに入られ、直接触ることができないのはいたしかたないところだが、やはり本は手にとつてみたいと思う。このことは、この春、神奈川県立近代美術館・鎌倉別館で開催されていた「美しい本―湯川書房の書物と版画」でも感じたことである。そこに展示されていたのは、「装幀や製本に意匠を凝らした限定本」で、谷崎潤一郎や辻邦生、村上春樹など古今の作家の「文学作品を気鋭の美術家の作品と結びあわせた独創的な書物」（パンフレット）とあるだけに、本と言うより美術品と言った方が当たっているような稀覯本なので、ガラス越しに眺めるしかないかと思いつつも、本は手にとつて見たいものだと思つたのであった。

絵本の森にあるのが、百年前のオリジナルなのか、わが家にあるのと同じ復刻版なのかは分からないが、ここで直接触れられないなら、復刻版でもかまわないので、家に戻ってゆっくりじっくり読んでみようと思つた次第で、その成果が、前記のロセッティでありコメニウスということになる。

第一展示館の「欧米絵本のあゆみ」とは反対側のコーナーに、吉田新一文庫と名づけられた魅力的な一画があった。案内によれば、吉田新一氏は、立教大学で教鞭を執られて

田氏の書架のガラス戸をこじ開けようとしていたご婦人がいたと言っていた。自分にとつて懐かしかったのか、孫にでも買ってやりたいと思つたのか、ちよつと手にとつてみたいと思つたのだらう。その気持ちは分からなくないが、ここも直接触ることはできない仕組みになっていた。

帰ってからしばらくして、家の書架を片づけていて、思いがけない本を見つけた。吉田新一著「絵本の魅力」である。絵本の森の、吉田新一文庫の片隅に置かれた机の上に立てかけられていた同名の本を手にしたことは覚えていたが、自分の家の本棚にも収まっていたとは思わなかった。思えば、私の児童書への案内人は、もっぱら瀬田貞二氏だったのだ、吉田氏の著作を購入していたということには思い至らなかったのだ。そういう具合だから、もちろん読んでもいい。目次を見ると、オズボーンコレクションやベルリンコレクションに収められている作家たちの名前が並んでいるので、これらのコレクションを読むときの強力な案内人になってくれることは間違いない。

犀屋別荘訪問―または、「杏っ子」片手の散歩―

さて、この絵本の森美術館の第一展示館は、屋根の中央部分が丸い展望台のようになった特徴ある建物だと述べた。入ってみると、この「展望台」部分は吹き抜けになつてい

て、正面にある木製の階段を使って二階に上ることが出来る。その二階部分には部屋はなく、壁に沿った回廊から、吹き抜けのホールを見下ろせるようになっていた。

その回廊の壁に、モノクロの写真が数点展示されていた。どれも、開発されて間もない頃の軽井沢の町を写した写真のようだった。その中の一枚の前で、しばらく足が止まった。それは、ある家の庭に佇む二人の人物を写した写真で、着物はその家の主、室生犀星、コート姿はそこを訪れた佐藤春夫であった。春夫は、普段は着物で過ごすことが多く、ここへは列車旅と言うことで洋装で来たが、難儀だったようだと説明がつけられていた。

私たちは、絵本の森を訪れた翌日には、碓井峠まで足を伸ばしてみようと考えていた。春夫の訪れた犀星別荘は、峠に登る手前の旧軽井沢にあるので、ここで写真と巡り合えたことは、別荘訪問へのいい動機づけとなった。

宿泊していたところから旧軽井沢までは、大通りから一本入った川沿いの林の中の道を行くことにした。そこは、別荘地帯になっているが、六月初旬ということもあって、主の来ている別荘はまだ多くはないようだった。この日、私たちが辿った道が、犀星の作品に、「マンペイの道路を矢ヶ崎川の土手に出て、サナトリウムの白い長い道を走った」（「杏つ子」^{p347}）と、描かれている。これは、主

人公の杏子が、来客を自転車に乗せて別荘から駅まで送るところなので、私たちとは逆の行程ということになる。この小道は、今では「ささやきの小径」と呼ばれているのではなからうか。マンペイは、おそらく万平ホテル。近くにサナトリウムがあったということだが、現在は影も形もなく、その辺りは木陰の駐車場になっている。

犀星別荘は、平成天皇・皇后陛下が結ばれるきっかけになったと言われているテニスコートの少し先にあるはずである。「・・・大通りから裏に出て、テニスコートの横手を突っ切ると、山を後ろにした一軒の家の中には、表から見えるところに電灯が点いて・・・」（同^{p284}）とあるので、コートまで来れば、もう間もなくである。

ここで少々寄り道をする。このクラブハウスは、道から少し奥まった所にあつて見えにくいので、今まで気にも留めなかったが、ウィリアム・ヴォーリズの設計による建物だという。現在タリアセンに移築されている、旧朝吹別荘の睡鳩荘もヴォーリズの設計によるもので、元々は、この近所にあつたはずである。調べてみると、睡鳩荘はつるや旅館の少し先、二の手橋の上の方ということなので、室生犀星文学碑の立つ辺りだったのかもしれない。

いやいや、ヴォーリズ別荘ではない、犀星別荘を目指しているのだった。昭和の記念すべきテニスコートを右手に

見ながら、狭い坂道を登って行くと、右に折れる道端に、犀星記念館（別荘）を指し示す案内が出ていた。しかしながら、木の枝を掻き分けるようにして進まなければならないので、記念館とは名ばかりで、今や、犀星を読む人もそれほどいないだろうから、もはや廃屋になっているのではないかと心配になったが、すぐに小ぎれいな板塀の前に出ることができた。そこが室生犀星記念館だった。

庭先に立って、私は不思議な感覚を覚えたのだった。それは、前の日に、絵本の森美術館の写真で見た建物が、目の前に厳然と存在しているということに由来するもので、言ってみれば、目の前の建物が半世紀以上前の建物と二重写しになって見えたのである。

ところで、ここでの私の仕事はただ一つ、第一展示館の写真で佐藤春夫が立っていた庭石を探し出して、そこに立ってポーズをきめることである。というのも、このシリーズの第四回目で、私は和歌山県・新宮に移築された春夫の旧宅まで行き、日本文学大系第四十二巻（佐藤春夫集）の扉写真にある、二階サンルームから下を見下ろしながら煙草をくゆらす春夫のポーズを真似て来たのだった。だから、ここ軽井沢でも、立つべき場所を決めるべく、庭石の上を行ったり来たりしながら、この石だろうか、こつちだと建物に近すぎるような気がするが・・・などと妻と話してい

ると、挙動不審とも思われたのだろう。「何かお探しですか？」と声をかけてくる人がいた。前の日に絵本の森で見えて来た写真のことを話すと、すぐに状況を理解してもらえたようで、「それは、多分、この石でしょう」と教えてくれた。その石の上に立って撮ってもらった写真と、日本文学大系第四十七巻（室生犀星・萩原朔太郎集）の月報に掲載されている写真（第一展示室に掲示されていたのと同じ写真が月報に掲載されていることに、これを執筆しているときに気づいた！）を見比べて、間違いないことを確認したのである。

写真が撮られた日、春夫はどんな用向きがあつて、この地にいる犀星を訪ねたのだろう。彼らの間に、どのような親交があつたのかは知らないが、写真が掲載されていた月報に、「佐藤春夫は・・・犀星の〈悪文〉をきびしく批判した」とあるので、ちよつと気になったのである。

確かに、犀星の作品には、所々、読みにくい箇所がある。たとえば、「為子はその晩、平一にわけの分からぬことの一つを、為子らしいその時代の女の言葉のこして、一年あまりで、青井の家を去っていった。」（同^{p41}）という記述がある。平一の嫁である為子が、嫁いで一年ほどして、捨てゼリフ（？）を残して、婚家を去っていったということとを言っているのだが、文章のつながり具合が不自然であ

る。他にも、「(家に帰ろうとする杏子は)、裏小路に廻った、そしてテニスコートに出ると、町の方から不意に一台の自転車が馳つて来て、亮吉とすれちがいになり、杏子は自転車を停めた」(同^{p346})とある。文章全体の主語は杏子である。杏子は、表通りから裏小路へ廻り、テニスコートの前に出たのである。ここまでは問題ない。すると、町の方から一台の自転車が走ってきて、そこには、よく知っている亮吉が乗っていてすれ違いそうになったので、杏子は自分の乗っている自転車を停めたのである。小説なので、あまりに説明的になるのはよしとはしないが、読者を惑わすような記述はいかなるものかと思う。他にも、似たような箇所が見られるが、春夫の言う「悪文」が、このように、私にも分かるような文章を指して言っているのか・川端康成の作品にも、素人としては直したくなるような文章がいくつもあるが、犀星も川端も、大文豪なので、素人がとやかく言うことではないのだろう。

春夫の用向きについては、結論から言えば、全く分らなかった。「杏っ子」には、犀星たちが軽井沢に疎開する何年前前に、大森の自宅を春夫が訪れたことは書かれているが、「何か用事で来た」としか書かれていない。また、この作品では、もう一度、春夫の名前が出てくるが、それは春夫が編集に携わっていた三田文学に、文学修行中の杏

子の亭主が書いた詩を載せてもらうために「君の加勢をたのみたい」(同^{p567})と手紙を書いたという件で、これは軽井沢から戻った後の話である。

さて、私の任務に戻ろう。ともかく、私は、言われた石の上で春夫のポーズを決めたのである。すると、案内の男は、「向こうに、犀星が気に入っていた場所があるから、そちらでも一枚どうぞ・・・」と勧めてくれた。それは、母屋の縁側の片隅のことで、近くまで行くと、まさに、その気に入った場所に腰掛けて前方を見つめる犀星の写真が置かれていた。そこで、言われた通り、写真に合わせて犀星のポーズも決めて一枚撮ってきた。

案内の男に、ここに来る一月ほど前に、金沢の室生犀星記念館に行ってきたことを告げると、「それだったら、雨宝院にも行きましたか？」と聞かれたので、「その前を通って行ったのですが、寄りませんでした」と答えると、今度行ったら、是非ともお寺にも寄るようにと念を押された。その住職は話し好きなので、時間があれば、犀星にまつわる色々なことを教えてくれるだろうというのである。

金沢に、今度いつ行けるか分からないが、手ぶらで行くのも気が引けるので、題名だけは知っているが、読んだことがなかった「性に目覚める頃」や「杏っ子」など、いくつかの作品を読んでみた。小説家としてのデビュー作とも

言うべき「性に目覚める頃」は、犀星自身の生活を下敷きにしたものなのだろう。犀川畔にある「寂しい寺領の奥の院で自由に暮らした」頃の話で、河原から、大橋が見えたり、その大橋を渡って、片町にある本屋に、自分が投稿した詩が掲載されるはずの文芸誌を買いに行くなど、私の見て来た金沢の町の様子が書かれている。

この「性に目覚める頃」は、日本文学大系(第四十七巻)に収められているが、その扉写真には、軽井沢の家の庭石に腰掛ける犀星の姿が写っており、その背景には、私たちが見て来た別荘が映り込んでいる。写真の中で犀星が腰掛けているのは、佐藤春夫が立っていた庭石の、二つ、三つ手前の庭石で、先の案内の男は、私にここにも座るようには勧めなかったところを見ると、この写真のことは知らなかったのではなからうか。構図や光の当て方など、落ち着いた風格ある写真で、谷田昌平の名前が入っているところを見ると、これはプロの写真家が撮ったものということだろう。犀星記念館には、この庭石に腰掛ける犀星の写真を持って、もう一度ポーズを決めに行かなければ、と思

参考文献

- クリステイナ・ロセッティと大正期の童謡運動 高橋美帆 奈良工業高等専門学校 研究紀要 第四十号 (二〇〇四年)
- シング・ソング クリステイナ・ロセッティ詩 アーサー・ヒューズ画 復刻 世界の絵本館 オズボーン・コレクション ほるぷ出版 一九七九年
- 世界図絵 ヨハン・A・コメニウス 復刻 世界の絵本館 オズボーン・コレクション ほるぷ出版 一九七九年
- 現代日本文学大系 第47巻 筑摩書房
- 杏っ子 新潮文庫 平成十三年 改版